

○10番（小林秀樹）

おはようございます。10番、小林秀樹でございます。

通告書に基づきまして、質問をさせていただきます。

けさ、こちらに向かってくるときに、富士山の真っ白な姿を見て非常に晴れ晴れしく思いまして、今日一日もよい日かなというふうな予感もいたしました。そこで、私は、今回、一つの質問でございます。地域のイベントから脱皮、観光資源につなげるためにというタイトルでございます。

開成町は、南部開発に継続・先行投資しております。将来に向けて地域発展の原点はいつも現在にあり、町民はつぶさに、その成り行きに注目し期待しております。観光として見たとき、種々のイベントは点から線、面への展開で広域化につながり必要があります。地域観光に関して、3問の具体的回答をいただきたいと思っております。

一つ、金太郎マラソンに、町はどのようにかかわってきましたか。今後は、どのようにかかわっていきますか。二つ、尊徳翁栢山道ルートを整備して足柄地域の観光資源に発展させましょう。観光資源の少ない開成町、松田町の呼びかけに、どうこたえていきますか。町と酒匂川のきずな、尊徳翁に再登場願ひ、観光化を支援してもらおうではありませんか。ジョギングコースに設定して、町民健康増進運動の側面をしましょう。三つ、オリジナル秋の玉手箱を北部地区イベントに定着させませんか。玉手箱は、発足から3年半が経過しております。25年度は、どう発展させていきますか。北部地区に目が向く点から面へ、発展のきっかけをつくる意思はどうでしょうか。瀬戸屋敷管理並びに町の観光事業を、行政とどう分離、組織化していきますか。

以上でございます。

○議長（茅沼隆文）

町長。

○町長（府川裕一）

小林議員のご質問にお答えします。

最初の質問、金太郎マラソンについて。

金太郎マラソンは、足柄大橋の開通を記念して始まったマラソン大会です。昨年は東日本大震災を受けて開催が自粛されましたが、今年は25回目の大会が行われ、各地から約3,000人に及ぶランナーが参加したと思っております。このマラソンを主催するのは月例南足柄マラソン実行委員会となっておりますが、実質的には個人の方が単独で続けられてきたと承知をしております。この大会と町とのかかわりは特にはなく、形式的に後援名義に開成町の名称を使用することを許可し、また、本年大会では南足柄市長、大井町長とともに、開成町長として大会副会長職に名を連ねることにとどまっております。

この方からは、規模が大きくなり過ぎてしまい、個人単独での開催は難しくなっていると聞いておりました。私としましても、もし、これだけの大会が消滅してしまうことになったらもったいない、広い地域から多くの人が集まるという実績もあること

を考えれば町特産品のPRの場にもなるのではないかという思いから、町行政が単独で引き継ぐということは考えておりませんが、他市・町、スポーツ関係各団体を巻き込んだ大きな枠組みをつくることができるものなら、そこが引き継ぐということは検討できるのではないかと考え、各方面に内々に打診をしてみました。また、どのような枠組みをつくるにしろ、金太郎の名を冠した大会であることから南足柄市には関係していただく必要がありますので、11月に市・町で、この取り扱いについて協議をいたしました。

その協議の結論は、一つに個人的に取り組んでいた事業を実質的に行政が引き取るということはない、また、そもそも例年5月に実施されていた大会に向けて、これから体制をつくり始めるのでは間に合わない、金太郎マラソンとは別に関係している1市2町が協力しながら地域を活性化できる事業を考えたいということから、このマラソンを引き継ぐことはしないという結論になりました。これによりまして、金太郎マラソンが継続されるかどうかは、担当されていた方のご判断になることになると思います。このまま継続して実施されるということになれば、町としては、これまでと同様のかかわり方をするということになると思います。

今後は、このマラソンがつないできた南足柄市、開成町、大井町の協力によりまして、この地域の魅力を多くの人に伝える行事の開催を協議していきたいと思っております。折しも平成26年度には酒匂川2号橋が開通し、大井町、開成町、さらには南足柄市までの1本の道でつながりますので、マラソンにこだわらず地域興し、魅力発信につながるイベントの実施に向けて協議していきたいと考えております。

次に、尊徳翁栢山道の整備についてのご質問です。

この尊徳翁栢山道とは、松田駅より栢山の二宮尊徳翁誕生地までの約6キロの道のりのことを指しております。明治末期、東海道本線は現在の御殿場線経由であり、小田急線はまだ開通していなかったため、尊徳誕生地へ行く方は松田駅から徒歩で向かっていたということでもあります。このため、起点となる松田駅に尊徳誕生地までの道標として、ミキモト真珠店の創業者である御木本幸吉氏が石碑を建立しております。本年10月19日には、この石碑を移設し、二宮金次郎像を設置したポケットパークを松田町が整備したとの報道がされております。

この石碑の移設や金次郎像の設置に対し、昨年9月に松田町から小田原市と開成町に協力の依頼がありました。しかしながら、当初予定していた県の補助金等の活用が難しいことから、平成24年度の具体的な事業展開は見送られました。そのため、今回、松田町は単独で石碑を移設し、ポケットパークを整備したものと認識をしております。当初の松田町の計画では、栢山道ルートの設定や道標の設置、PRイベントの開催などを広域連携の中で実施したいとの意向でしたが、その後、具体的な提案はされておられません。

開成町は、尊徳翁にゆかりの市町村で構成する全国報徳研究市町村協議会に参画し、尊徳翁のまちづくりや人づくりを学び伝える「全国報徳サミット」にも毎年参加をしております。県内では、ほかに小田原市と秦野市が報徳サミットに参加していますが、

報徳思想や尊徳翁を生かした取り組みについては、サミットの活動内容も踏まえて、今後、検討したいと考えております。

一方、開成町には、直接、尊徳翁に関連する遺跡等はほとんどなく、その由来を尊徳翁に持つ酒匂川堤防の松並木が存在するのみであり、観光的な効果などは未知数と言わざるを得ません。いずれにしても、松田町から具体的なアプローチがあった段階で、開成町としてのメリットを勘案した上で必要な協力を行っていきたいと考えております。また、ご提案になったジョギングコースの設定についても、その中で検討していきたいと考えております。

オリジナル秋の玉手箱を北部地区のイベントに定着させるようにということですが、一つ目の玉手箱は発足から3年半経過、平成25年度はどう発展させるかについてですが、まず初めにイベントに対する町の考え方について説明をさせていただきます。

新たなイベントは、行政が主体ではなく民間主導で行っていただき、行政は側面支援をしていくという考え方であります。秋の玉手箱については、平成21年度から開始され、今年で4回目になります。平成23年度までの秋の玉手箱は、土曜日及び日曜日の2日間で開催を行いました。今年度は1日開催に変更し、実施をいたしました。

次に、主催している団体ですが、町の商工振興会を中心に、飲食店組合、農業委員会、農産物直販組合、瀬戸屋敷、JAかながわ西湘農業協同組合開成支所、瀬戸屋敷クラブ及び金井島花づくり同好会などが実行委員会を設立して運営しております。

催し物の内容ですが、瀬戸屋敷内で実施しているイベントや展示及び中庭での菊の展示、参画団体の模擬店、開成だんご汁委員会が実施している千人鍋開成だんご汁が開催されました。さきに説明したように行政は側面支援するものと考えておりますので、秋の玉手箱につきましては、2年間限定で支援し、町内の関係団体が自主的にイベントを運営していただけるように、行政も勉強しながら実施したものであります。そのため、関係団体から成る実行委員会が中心となり企画・運営されてきました。

平成23年度の実施時におきましては、実行委員会での審議で今後の運営や自主財源の確保について検討してきました。特に、今年度の実行委員会では、秋の玉手箱の運営と開催費用の確保方法に妙案がなく、秋の玉手箱の実施については今年度限りで打ち切ることを実行委員会で確認をしたところでありました。したがって、25年度は実施する予定はありません。

次に、二つ目の北部地区に目が向く点から面へ、発展のきっかけをつくる意思はですが、北部地区での町のイベントは2月から3月に実施するひなまつり、6月にあじさい祭があります。また、瀬戸屋敷自体では、瀬戸屋敷の年中行事として正月、端午の節句、七夕、十五夜などを実施しております。これ以外では、北部の農地及び農業体験といたしまして平成11年度から実施している米栽培体験学習塾によって、都市農民との交流を図っております。農業体験では、平成22年度からは、試行的ではありますが、瀬戸屋敷見学と北部の柿もぎ、野菜取りの農業体験を絡めたツアーを実施しております。平成24年度は、箱根町観光協会へ働きかけ、柿もぎ体験と温室で行

う足柄牛を使用したバーベキューなどのメニューを実施いたしました。このほかにも瀬戸屋敷で開催される生涯学習事業として、あしがり学校や蔵ひろばなどを実施しております。

これらの事業は、全て瀬戸屋敷を中心とした開成町北部地域全体を面としたイベントとして展開してきたものと考えております。このような事業は、先ほどのイベントと同じく、農家や商工者、飲食店などにそのきっかけを提供しているもので、その後の展開は関係者や団体をお願いをしているところであります。町は、今後も瀬戸屋敷を中心とした北部地域にイベントや農業を絡めた事業を展開する考えであります。

最後に、瀬戸屋敷の管理並びに町の観光事業を行政とどう分離、組織化していくかについてですが、瀬戸屋敷につきましては、平成22年度に実施した事業仕分けでの評価にありましたように、瀬戸屋敷の管理方法や事業のあり方について抜本的な見直しが必要とされ、民間活力の導入として指定管理者制度の導入を検討することとされております。これにより、平成24年度に瀬戸屋敷指定管理者制導入の可能性調査業務委託を現在実施をしているところであります。

次に、町の観光事業と行政との関係ですが、開成町は観光名勝地のように年間の集客を確保できるような土地柄でないため、町で行っているイベントは農業・商工業の振興や町の活性化、地域の活性化を図る一つの手段として行うものであります。このような現状で南足柄市、山北町や松田町にあるような観光協会を町行政から独立して設立をし各種のイベントを実施する方法は、観光協会の運営母体である旅館や観光客を対象とした商店などの協力が必要とされると思います。開成町では、これら観光事業の核となる店舗の数が少ないことから、独立採算制をとることが大変難しいと思われます。仮に、現在、町が実施しているイベントの経費全額をもって業者や一般イベント会社に委託することは可能とは思いますが、今まで養ってきた開成町の手づくりによるイベントが、地元住民や団体の協力体制等が希薄になり、今までどおりの開成町の味のあるイベントができなくなるのではないかと考えられます。いましばらく現状を維持し、町商工振興会や各種団体の動向を見守りながら考えていきたいと思っております。

以上です。よろしく願いいたします。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

議長、再質問の中で、一部、パンフレットを使わせていただきますので、よろしく願いいたします。

○議長（茅沼隆文）

はい、結構です。

○10番（小林秀樹）

それでは、金太郎マラソンについて再質問させていただきます。

金太郎マラソン、今後の方向というのを今、町長のほうから示していただいたわけ

なのですが、四半世紀続いているのです、25周年といいますと。去年は、震災で中止しました。今年は3,484名の申し込み、実質は2,800名ぐらいの方が参加されたようです。北海道から沖縄までの方が参加されています。もちろん関東、神奈川県が主体になります。神奈川県でいえば、全体の約70%の方が県民です。しかも、神奈川県では、足柄上郡について見ますと比較的少ないのですけれども、やはり横浜、小田原、秦野というところが上位で、横浜などは21%ございます。足柄上郡では10%以下の参加でございますが、それにしても、この地域、神奈川県の方が非常に金太郎マラソンについて楽しみにしているというのが、この数字からわかるわけでございます。

間もなく酒匂川の第2橋も開通しますので、これらを含めると二乗の効果があると。ひいては、これが地域の活性化、それから観光という面につながると予測しています。現に、現在、開催されました金太郎マラソンの歴史を見ましても、参加人数の約2倍以上の方が当日は集まるようでございます。それで、その方たちの希望によって、例えば、アサヒビールへ行くというのであれば、大変バスを連ねた状態で、非常に受け入れ側もてんでこ舞いしたということも聞いております。そういう意味では、主となる会場が開成町であるというところが、大いに開成町はこれを大切に発展させていかなければいけないのではないかというふうに思います。

金太郎マラソン、町長のお考えでは、とりあえずはできないということでございますが、開成町が今後、これにかかわって行く、あるいは1市2町で共同開催を考えているということは、具体的にはどういう内容でございましょうか。

○議長（茅沼隆文）

町民サービス部長。

○町民サービス部長（小野真二）

ただいまのご質問にお答えをさせていただきます。

マラソンの詳細につきまして、ご説明いただきましたけれども、現在、このような形でこのマラソンが運営されているということは非常に素晴らしいことだというふうに思います。それが25回も続いてきたということは、またなお素晴らしいことです。私の承知している限りでは、足柄大橋が開通するときに記念として1回だけやるのだよというふうなマラソンだというふうに伺っております。そのときから市町に対して何らかの働きかけがあったということも、私も担当しておりまして聞いておりますけれども、それが成立しないで、先ほど町長が申しましたように個人の方がやっておられるということにつきましては、ある意味、何らかのものがあるのではないのかなというふうに考えることもできるのではないのかなというふうに思っております。

要綱等を見させていただきますと、町長、市長等が名を連ねているということはありますけれども、実際の市町村との関係はよくないということですか、あるいは事故があったということも一、二度あったと。昨年ですか、死亡事故があったということも聞いております。そういうふうなものに行政がかかわっていくということの基本的な考え方につきましては、先ほど町長が申しましたようなことなのですから、

民間の方にやっていただいて、このようないろいろな問題があるものを、そのまま行政がやっていくということはいかななものかなと。同じような目的を達成する方法といたしまして考えていったほうが、よりいいのではないのかなというふうに考えております。

この質問の趣旨が観光としてということのようでございますけれども、観光として考えていくのであれば、広域連携の中で捉えて、マラソンというものに限定しないで考えていくほうがベターであるということを考えておりますので、そういう方向でこれから進めていきたいというふうに思っているということでございます。

あと、以前、開成町の中で自転車の大会等を行ったことがあるということも承知はしておりますけれども、このときも多くの方に参加いただいたようでございますが、余り観光というもの、そのものの展開には結びつかなかったというような認識もしておりますので、繰り返しになりますけれども、広域という範囲の中で、より観光に近づけるもの、あるいは連携のとれるものというものをこれから模索していこうというふうに考えているというふうにご理解いただければと思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

ないとするとなれば、その阻害要因というのは今、部長のほうからお伺いしましたのですが、いわゆる個人でやってきたので体制がしっかりしていない、それから事故があったというようなことのようなのですが。ただ、私は、確かに、そういうことはわかりますが、やはり25年間続いてきたという、この貴重なことを無にしたいくはないと思うのです。一度とまってしまうと、それを回復するのはなかなか難しいというのは、ほかの事例でも幾つもあるのですけれども、町単独の考え、あるいは両市・町の考えも当然、入れての開催になるわけなのでしょうけれども、これを楽しみにしている、これを足柄地域の一つの名物にするということを考えると、何らかのマラソン、あるいは、それに類するものをつなげていくことがよろしいかというふうに感じます。

マラソンの企画の中で、開成町として名義後援をされています。町長は3連名で大会副会長ということでお話がありました。前回の大会は、これがちょっと違ってまして、後援は、以前、開成町は教育委員会が後援されていました。それから開成町に前回なって、今回も開成町になっております。それから、顧問として前は3市首長がなっておられまして、今回は大会副会長ということになっているのですが、この辺の顧問から大会副会長になったという認識と大会を考える心構えというのは、町としては、どういうふうに考えられておりましたでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

町民サービス部長。

○町民サービス部長（小野真二）

お答えさせていただきます。

従前、教育委員会という名前が出ていたということに関してでございますが、それが現在、開成町になっているということですが、スポーツを担当しておりますところが教育委員会から自治活動応援課に移りましたので、教育委員会部局から町部局に移ったということで教育委員会から開成町に変わったという経緯がございます。

あと、顧問、副会長等という関係でございますけれども、はっきり申しまして、この書類をいただく前に「副会長にご就任いただけますか」というようなアプローチというものはございません。端的に申しますと、この文章が来て、「え、副会長なの」というような状況で物事が進んでいるという状況でございます。これに対して何ら意見等を申したものはございませんけれども、その一つが、「開成町」の後ろに「自治活動応援課」というものが入っていると思いますけれども、こちらを消してくださいというようなお願いですとかはさせていただきます。

あと、このマラソン大会を無にするというお話がありましたけれども、先日、主催をしております方とお話をする機会もございましたけれども、明確に私の口から申し上げることではないと思いますけれども、金太郎マラソンにつきましては今後も考えていきたい、続けていきたいという意思をお示しになっておられました。ですから、25回という、確かに四半世紀ということで非常に長く続いているものでございますけれども、こういう大会が個人の方が主になって進んだということは非常に素晴らしいことですし、それに関して副会長あるいは後援とか、そういう形でのサポートはしていきたいというふうに思いますけれども、同じ趣旨で物事を行うのであれば、また違う方法で考えていきたいという趣旨でございますので、ご理解いただければというふうに思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

次の質問に参りたいと思います。尊徳翁の栢山道に関連することでございます。

他町の提案、松田町が提案されたことは、松田町、開成町、小田原市とかかかわっているのですが、松田町のみならず開成町、小田原市にもかかかわってもらおうと、一緒にやろうという呼びかけがございました。そのことについて先ほどの答弁もありましたのですが、この呼びかけに呼応できないことは大変残念であるというふうに思っております。

幸吉翁が訪ねた道というのは、ほぼ解明されております。簡単に言いますと、この裏の松田町から真っすぐ開成町に来る十文字橋のかかった県道、それから途中、町道204号線ですか、矢倉沢往還道という吉田島大長寺を通過して下島に抜ける道、下島からは現在の県道の720号線を栢山まで抜けると。それから、栢山を過ぎては報徳橋から来る道と合流しますけれども、そこから旧道の道に入って尊徳翁の生家のところにたどり着くという道で、ほぼ解明ができております。それから幸吉翁が歩いて行ったか馬車でいったかということについても、間もなく、これは、はっきりすること

だというふうに思っております。

そういうことで、今の時代を下島から県道をウォークするということは、なかなか、これは危険も伴って難しい。であれば、今現在ある土手のコースを一部通ると、あるいは半分以上になるかもしれませんが、そういうルートが当然考えられます。幸吉翁が通った道は道として、それからジョギングコースは土手のコースを設定するということでは、やはり案内も十分できると思いますし、現在も土手は皆様がジョギングに使っております。

既に、開成町、松田、小田原で、非常に立派なパンフレットができております。これが「酒匂川水辺ウォーク」というA3の四つ折りになっているのですが、裏は、このように酒匂川べりの土手のコースが設定されております。こちらには、松田町、開成町、小田原市のスポットが示されております。これは、開成町の産業振興課長の池谷課長が会長を務めておられる関係で立派なものができておられるというふうに認識しておりますけれども、この中で見どころとかワンポイント、それからビューポイントというのが36ばかりあるのですが、開成町が圧倒的に多いのです。距離としても小田原と同等ぐらいの距離があるのですが、小田原はちょっと少なく、松田はほんの少ないのです。そういうことでも、このコースは、非常に開成町にとっても、みんなが注目するし観光的な価値が十分あるというふうに考えております。こういうコースを設定すると、あるいは考えるということに対して、町としてのお考えを伺いたいと思います。

○議長（茅沼隆文）

行政推進部長。

○行政推進部長（芳山 忠）

最初に、先ほどの町長答弁にもございましたが、一つ、ちょっと認識が異なるところがありますので答弁させていただきますけれども、松田町からの提案の内容と。具体的な提案、申し入れがあったということでは、まずございません。これは、あくまでも事務局に対する意見打診といいますか、内々のお話ということでございまして、その中でも、そういったウォーキングルートまで完全に整備をして、最初から石碑を移設してポケットパークをつくるといったものが全て入っていたわけではございません。

簡単に申し上げますと、最初のお話というのは、石碑を移設してポケットパークをつくるという部分に対して小田原市と本町に対して協力をお願いしたいというのが内々のお話でございました。それにつきましても、いわゆる補助金の活用が前提になっておりましたが、これは補助対象にはならない事業ということでございますので、そうしますと、端的に申し上げますと、松田町が遺跡を移すのに本町の財源を投入すると、町費を投入することになりますので、これは小田原市も同様の考え方がなりますので、そこまではちょっと難しいのではないかというお話をさせていただいたところがございます。その後、松田町からの具体的な申し入れ等はございませんでした。その後、松田町は独自に、そういったことを自主財源の中でなされたというふう

に承知しております。

当然、その後の尊徳翁の生家までのそういったルートについては、これは小田原市も当然ありますし本町の中も通っていくわけでございますけれども、そういったものの整備、あるいは道標を立てるとか、そういったことを共通のルートとして今後、もしやっていくということであれば、そういったことについては、1市2町の協議の中で可能な部分については連携し協力していくということについては、前向きに考えてもよろしいのかなというふうには思っております。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

あと、ジョギングコースの設定についての話を。

○行政推進部長（芳山 忠）

失礼しました。

ジョギングコースにつきましても、それとの関連で、当然、これは本町だけというわけにも参りませんので、1市2町の中での連携が可能であればと、可能な範囲でということでは考えられるのではないかとというふうに思います。

以上です。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

既に、このコースについては、ボランティア団体、松田あるいは開成、ほか小田原で構成する二つの団体が検討に入っております。それまでもなく、今までも、こういうルートの団体でのウォーク、あるいは個人でのウォークというのは行われているわけなのですが、ぜひ、ここは開成町だけでなく、やはり1市2町という連携の中で取り組みをしていただきたいというふうに思います。町がお金を出さないとということにかかわらず、町としての支援、後援というものを出していただければ、これが多くの方々への関心の集まる場所ではないかとというふうに思いますので、よろしくお願ひしたいとします。

このコース、小学生から老若男女まで、非常に、朝、昼、夕方と、多くの方が利用されています。今、コースの中の一部かもしれませんが、やはり、これを松田、開成、小田原というルートでつなげれば、また地域の活性、それから観光面への点から線への展開ができるのではないかとします。二宮尊徳翁という偉人、それから御木本幸吉という二人の偉人を、ここで利用させていただくとか、そういう人たちをたたえながら歴史を学び、それから地域を結びつけていく、いわゆる温故知新の考えで、こういうことを進めていきたいなというふうに感じております。ぜひ、私どもも、これからまたご提案したいとしますので、それには、ひとつ前向きなご回答、姿勢をお願ひしたいというふうに思います。

それでは、次の三つ目の質問に参ります。

秋の玉手箱に関してですが、先ほどの答弁の中で、秋の玉手箱は一応、終わったの

だよと、それは実行委員会で合意したのだということを伺いました。それに加えて、イベントについて今後は町が主体とならない、側面支援をするのだという基本姿勢が示されています。この側面支援という基本姿勢については、これは、いつからの実施というかお考えなのでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

産業振興課長。

○産業振興課長（池谷勝則）

イベントに関して開成町のかかわり方という形になろうかと思うのですが、こちらにつきましては、町は当初からイベントを町が全部やるものではなくて、これはあくまでも地域の方、また関係する団体、これらが主となり、町はPRとか側面支援、後援、後ろでの支援ですね、後援支援をすると、そういうようなことで当初から進めております。

特に、先ほど町長の答弁にもありましたように、秋の玉手箱につきましては平成21年度から始まっておりますが、当初から、こちらについては町の新しいイベントとしての位置づけで、2年間限定で、とりあえず側面支援というか大々的に、大々的というかりードして、その後は側面支援に回っていこうと、そういうふうなことをベースにして実施したものと理解しております。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

おっしゃることは理解もするのですが、数回続けて非常に見通しがついてきたなど。秋の玉手箱もそうですし、その中身の千人鍋というのもそうだと思います。やはり、これも町民や近隣地域の住民が楽しみにしているものだと思うのですが、これを実行委員会と町の約束なのだからやめますということについて、町としては抵抗感というのがありますか。せつかく、これまでそうやって町も支援してきたので、ここでやめてしまうと、それが町の姿勢だと思うとちょっと残念だなというふうに思うのですが、そのことについてのお考えをお願いいたします。

○議長（茅沼隆文）

まちづくり部長。

○まちづくり部長（石井 護）

それでは、私のほうからお答えさせていただきたいと思いますが、抵抗感というふうに言われましたが、基本的には実行委員会形式で行っていますけれども、皆さん、ご存じのとおり、この玉手箱に限らず、あじさい祭ですとか阿波おどり等も実質の事務というのは職員が行っています。これは、皆さん、ご存じかと思いますが、そういう状況の中で、抵抗感と言われますけれども、よく言われる行政は一回始めると逆になかなか終わらないというような部分もございます。玉手箱は3年で定着してきたというふうに言われましたが、その部分では、まさに小林議員が今、おっしゃられたように、一つ、千人鍋というのがございます。これは、飲食店組合で

すか、そちらのほうが非常に力を入れて行って、商工振興会でしたっけ、要は、これは秋の玉手箱から生まれたものです。

それで、今、事務サイドでの話になりますけれども、ぜひ、これを続けていきたい。玉手箱ではなくて、玉手箱は実行委員会でもう廃止が決まったのですけれども、機会があれば違った場面で何とかやっていきたいと。ですから、行政とすれば、それは、ひとは玉手箱を行った成果ではないかと思います。団体が自発的に千人鍋、だんご汁が言われるとおり非常に好評ですから、これはどこかでやっていきたいと。そういう部分については行政は側面支援をしていきたいというふうに考えてございますので、そういうふうにご理解いただければと思います。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

一つは安心しました。秋の玉手箱をやめるということについては、いろいろな理由は検討されていると思うのですが、やはり一番主たるものはお金でしょうか、それとも人でしょうか、それとも何なのでしょうか。

○議長（茅沼隆文）

まちづくり部長。

○まちづくり部長（石井 護）

それは、よく言われる、経営もそうですけれども人、物、金、やはり、そこは基本中の基本かなと思います。やはり財政的なというか、何かものを起こすには、まずは財政的なものがなければなかなか難しい。

それと、人につきましても同じくそうですけれども、ただ、玉手箱につきましては当初から、先ほどからご回答しているように、極力といいますか、実行委員会の中で構成員の方がいろいろ、私益というのですか、俗に言う、そういったものを提供して自分たちで行ってきたイベントではあります。ほかのイベントと比較すればかなり実行委員会の構成員の方がご苦労なさっているのですけれども、ちょっとやり切れない部分があったというのが実態かと思います。

○議長（茅沼隆文）

小林秀樹君。

○10番（小林秀樹）

今のお話の中で、財政的にも、もちろんですし、人とのかわりも関係があるというふうに伺いました。お金の面については、聞くところによると25万ぐらいではないかというふうなことを聞いております。いわゆる出費としての経費です。ですから、それが賄えないから秋の玉手箱をやめるのだということとなると、非常に残念なのです。やはり、この25万。確かに、25万というのは貴重なお金だと思います。これを何とか工面するような。例えば、今年から発足した自主活動による町の補助事業、支援事業というのがありますが、そういうことを活用しつつ、何とかそういう知恵が出ないものかなというふうに思いますが。これは、やはり実行委員会で決めたことで

すから、それはそれで尊重しなければいけないと思います。

今、三つのイベントについて、いろいろご質問させていただきましたのですが、要は、私としては、せっかくのイベントがあるのに、あるいは定着しつつあるのに、これを全く否定するような形、あるいは中断するような形、あるいは逆戻りするような形をとっていかげなものであるのかということをご心配しております。開成町は、観光的にはなかなか難しいということをご聞いておりますが、先ほどの答弁の中でも非常に瀬戸屋敷中心の観光ということは努力されて実りつつあるのですが、一つ一つのイベントをとっても、これをつなげていくという姿勢をぜひ尊重していただきたいなと思います。

町民についても、それなりに町への協力というか、手を出すというのは十分、この活動の中でも見られると思いますので、ぜひ、そういうことも今後の大きな参考にしていただければというふうに思います。開成町が発展するには、ハードだけの問題ではなくて、やはりソフトの面、人の面が非常に特徴あるまちづくりを形成させている。第五次総合計画についても、開成町の人に対する非常に温かみ、あるいは期待というのが大きいわけでありますので、ぜひ、こういうイベントに対しての貴重な体験、ノウハウを今後ともいろいろな面で生かしていただきたいなというふうに思います。

私の質問をこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。